

「児童テレビアニメ映画における敵キャラクターの ジェンダー差とステレオタイプ化の分析」

本稿は「日本の児童アニメ映画」の悪役、その中でも最後の敵となるラスボスキャラクターと、それに追従するその他の悪役を、児童向け・男児向け・女児向けといったジャンルごとに、それぞれ悪役化した背景や「倒され方」に着目しながら分析し、第二次社会化の最中の子どもたちのジェンダー観に影響を与えるような表現が存在するのかを調べたものである。考察の対象とした映画は『ドラえもん』、『クレヨンしんちゃん』『プリキュア』『ドラゴンボール』シリーズの計 66 作品で、これまでの研究が手薄な 2000 年以降の作品も含む。

分析の結果、子どもたちの性役割意識に多大な影響を与えているメディアで「悪＝大人の男性、年老いた醜い女性」という図式が出来上がっていること、ジャンルや敵役のジェンダーによって倒され方（暴力、説得など）が違うなど、描写されている「悪役」の男性性・女性性に偏りがあることが明らかとなった。物語上の役割だとしても、子どもはそこから「社会での役割」を学び、取り込んでいってしまう。主人公など子どもと同年代で自己投影しやすいキャラクターは勿論、こういった悪役・大人たちの描写もメディアは今後考慮すべきである。